

グローバルな視座から見る瀬戸産地

名古屋大学大学院環境学研究科助教

松木 孝文

1 産地研究の見取り図

筆者は持続可能な地域のメカニズムを解明するため、地場産地を調査している。全体的には衰退しつつある地場産地の中、地域を支え続ける地場産地が存在する。こうした地場産地を研究することで持続可能な地域のメカニズムの一端を解くことができるのではないだろうか。そうした期待を抱きつつ 2003 年より約 7 年間、愛知県瀬戸市を中心に西濃尾東に広がる陶磁器産地に足を運んでいる。

本稿の目的は、この愛知県瀬戸市の陶磁器産業をとりあげ、グローバルな視座のもと、その位置づけを試みることにある。ここでは産地を次の 2 つに分類した。第一に、長い歴史をかけて形成された産地内関係の維持強化を基本戦略とする「第三のイタリア」的産地。第二に、新しい相手との関係形成をその基本戦略とする「産業クラスター」的産地。この 2 つの型の産地と比較し、その上で瀬戸産地の位置づけを示したい。

2 「第三のイタリア」型産地と瀬戸産地

「第三のイタリア」とは、地理的に南北の地域の間にあるヴェネツィア・フィレンツェ・ボローニャなどの、繊維・皮革・宝飾・陶芸等の地場産業を抱える都市を指す。早期に工業化を達成したイタリア北部は、ミラノ・ジェノヴァ・トリノの 3 都市が形成する「鉄の三角形」を中心に、大資本をその担い手とする工業都市を多数抱える。一方で南部は工業化が遅れており、農業中心の低所得地域である。そのどちらからも区別されることが「第三のイタリア」と呼ばれる所以である。この「第三のイタリア」が脚光を浴びるのは、1970 年代初頭のオイルショック以降のことである。当時の「第三のイタリア」は他の地域と比較すると深刻な打撃を免れて成長を維持し続けており、地域の自立を体現する新しい産業形態のモデルとして着目されたのである。一部先行研究においてもこの「第三のイタリア」と日本の地場産業の類似点が指摘され、地場産地の目指すべきモデルとして位置づけられている向きがある（佐々木 2001）。

この「第三のイタリア」に関してはピオリらの研究（Piore, Sable 1984）が詳しい。そこでは、めまぐるしい需要の変化に対応可能な「柔軟な生産様式」が存在すること、その生産様式を担う職人の再生産が同業者相互の扶助によって支えられること等が指摘されている。「第三のイタリア」型産地の基礎となっているのは、産地内に取り結ばれる信頼関係である。この「第三のイタリア」をかつての瀬戸産地と比較すると、両者の間にはいくつかの共通点を見出すことができる。同業組合の力が強く、様々な福利厚生を行なっていること、業界が中心となり行政に働きかけて教育機関を設立したこと、産地内部での交流が維持されていること等はその一例である。ただし瀬戸産地においては 1985 年のプラザ合意に伴い産地が衰退しはじめてから、産地内部での信頼関係が希薄になっている。そのため、強い信頼関係を基礎として形成されていた同業組合のリーダーシップ、様々な福利厚生、行政への発言力等も過去のものになりつつある。

3 「産業クラスター」型産地と瀬戸産地

産業クラスター戦略（Porter,1987）は、地理的に集積した企業・研究機関・自治体の間にネットワークを形成し、要素同士の新たな結びつきによりイノベーションを創出することを目指す戦略である。クラスター戦略に関しては現在多くの業績が発表されているが、それら先行研究の多くで、旧来から続く産地内関係は「しがらみ」「馴れ合い」などと表現され、発展の阻害要因として位置づけられている。この点において「第三のイタリア」論とは対照的である。この産業クラスター戦略は現在欧米を中心に多くの国で産業政策として取り入れられており、ある意味産業政策のトレンドとなっている。成功事例としては、アメリカテキサス州オースティンの情報技術産業、ペンシルバニア州フィラデルフィアのバイオ産業、フィンランドの各種クラスターなどを挙げることができる。

日本では2001年より経済産業省が「産業クラスター計画」を推進し、多くの企業・大学に参加を呼びかけている（産業クラスター計画推進室 2010）。この中には瀬戸産地の企業も数社含まれる。ただし、柔軟に関係を組み替える産業クラスターのやり方は馴染みにくいようである。筆者が該当企業に対して行なった聞き取り調査の範囲では、「非常に興味を惹かれる企業がある」などと、計画の意義は積極的に評価されつつも、それが新たなビジネスに発展するなどの成果につながった事例は確認できなかった。その理由としては「相手に関して十分に知らない」「信頼できるか相手かどうかわからない」等が挙げられた。

以上のように、産業クラスター「計画」は瀬戸産地に浸透していないが、工業用陶磁器部門に代表されるように、瀬戸産地と東海産業クラスターとの結びつきは決して弱くないことが知られている。ただし、そうした関係を形成する上では、血縁・地縁・学校縁などが関わる場合が多い。瀬戸産地では、何らかの紐帯で信頼関係が強化された場合に産業クラスターの形成が現実的なものになると考えられる。

4 瀬戸産地の位置づけと今後の課題

以上、2タイプの産地との比較を通して瀬戸産地の位置づけを試みたが、現状では完全にどちらかに分類することは難しく、両者の中間に位置していると判断せざるを得ない。新たな関係を築いて「産業クラスター」型産地を形成する場合、旧来の土着的関係を基礎として「第三のイタリア」型産地を目指す場合、どちらの場合においても「信頼」が重要な役割を果たすと考えられる。取引関係、経済的関係のコーディネイトのみに留まらず、こうした「信頼」をいかに担保するかを考えることで、産地における振興策は真に有効なものになるのではないだろうか。

参考文献

- Michael J Piore and Charles F.Sable, 1986,The Second IndustrialDevide. (=1993,山之内靖・永居浩一・石田あつみ訳『第二の産業分水嶺』筑摩書房)
- Porter,M.E,1987,Competitive Advantage of Nations. (=土岐坤ほか訳『国の競争優位 (上,下)』ダイヤモンド社)
- 産業クラスター計画推進室,2010「産業クラスターWEB」(<http://www.cluster.gr.jp/index.html>,2010.7.7)
- 佐々木雅之,2001『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』岩波書店